

平成 30 年3月期 第3四半期決算について

ANAホールディングスは2月1日(木)、平成 30 年3月期 第3四半期決算を取りまとめました。詳細は「平成 30 年3月期 第3四半期決算短信」をご参照ください。

1. 平成 30 年3月期 第3四半期の連結経営成績・連結財政状態

(1)概況

- 当第3四半期のわが国経済は、企業収益及び雇用環境の改善が続く中、個人消費の持ち直しが見られる等、景気は緩やかに回復しました。
- このような経済情勢の下、航空事業を中心に増収となったことから、売上高は 1兆4,908億円、営業利益は1,659億円、経常利益は1,638億円、また、当期から Peach・Aviation(株)を連結子会社としたことによる特別利益等を計上した結果、親会社株主に帰属する四半期純利益は1,529億円となり、それぞれ過去最高となりました。
- なお当社は、世界の代表的な社会的責任投資の指標である「Dow Jones Sustainability World Index」の構成銘柄として、日本の航空会社で初めて選定されました。
- また当社グループは、「バリアフリー・ユニバーサルサービスデザイン推進功労者表彰」において、航空運送分野としては、初めて内閣総理大臣表彰を受賞する等、「すべてのお客様に、より安心・快適に飛行機をご利用頂ける環境を創る」ことを目指して、ハード・ソフトの両面からサービスの開発・導入を進めていきます。

単位:億円(増減率を除き、単位未満は切り捨て)

【連結経営成績】	平成 30 年3月期 第3四半期	平成 29 年3月期 第3四半期	増減	増減率(%)
売上高	14,908	13,317	1,590	11.9
営業費用	13,248	12,015	1,233	10.3
営業損益	1,659	1,302	357	27.4
営業外損益	▲20	▲59	39	—
経常損益	1,638	1,242	396	31.9
特別損益	439	20	418	2,071.0
親会社株主に帰属する 四半期純損益	1,529	865	663	76.7

単位:億円(単位未満は切り捨て)

【セグメント情報】	平成 30 年3月期 第3四半期		平成 29 年3月期 第3四半期		増減	
	売上高	営業損益	売上高	営業損益	売上高	営業損益
航空事業	13,081	1,554	11,576	1,216	1,505	337
航空関連事業	2,115	114	1,925	90	190	23
旅行事業	1,219	36	1,220	32	▲0	4
商社事業	1,065	36	1,033	38	32	▲2
その他	281	23	251	11	29	12

(2) 航空事業

① 国内線旅客

- 国内線旅客は、10月に発生した台風の影響を受けたものの、需要に応じた各種割引運賃を設定したことに加え、ビジネス需要が堅調に推移したこと等により、旅客数・収入ともに前年同期を上回りました。
- 路線ネットワークでは、6月から中部＝宮古線を新規開設した他、ウィンターダイヤから広島空港の運用時間延長に伴い、羽田＝広島線の最終時間帯に増便する等、需要の取り込みを図りました。
- 営業面では、様々な旅のシーンに応じた「旅割タイムセール」を定期的実施し、需要喚起に努めました。また、地域活性化、訪日旅客増加を目的に、まだ知られていない日本の魅力の特設サイトや機内等において国内外に発信する「Taste of JAPAN by ANA -Explore the regions-」を12月から開始しました。
- サービス面では、10月よりプレミアムクラスの機内食サービスにおいて、羽田発着の一部路線のメニューと食器を一新するとともに、昼食の提供時間を拡大しました。
- また、羽田空港に続いて11月より新千歳空港で、空港での手続きのわかりやすさ、待ち時間の極小化を目的として、出発カウンターのレイアウトを変更し、自動手荷物預け機「ANA Baggage Drop」サービスを導入する等、空港から機内までのプロダクトとサービスのリニューアルを進め、お客様の快適性、利便性の向上に努めました。

結果として、国内線旅客収入は125億円の増収(前年同期比2.4%増)となりました。

(増減率、利用率を除き、単位未満は切り捨て)

【国内線旅客】	平成30年3月期 第3四半期	平成29年3月期 第3四半期	増減	増減率(%)
旅客収入(億円)	5,326	5,201	125	2.4
旅客数(千人)	33,799	32,645	1,153	3.5
座席キロ(百万)	44,481	44,958	▲477	▲1.1
旅客キロ(百万)	30,752	29,566	1,185	4.0
利用率(%)	69.1	65.8	3.4	——

② 国際線旅客

- 国際線旅客は、国際線ネットワークの拡充に伴い、日本発ビジネス需要が好調に推移していることに加え、旺盛な訪日需要を取り込んだこと等により、旅客数・収入ともに前年同期を上回りました。
- 路線ネットワークでは、8月から羽田＝ジャカルタ線、10月から成田＝ロサンゼルス線を1日2便へ増便し、首都圏発着のビジネス需要に加え、国内地方空港やアジア＝北米間の接続需要の取り込みを図りました。
- 営業面では、マレーシア行きのロングステイ向け運賃を設定し、将来的に市場の拡大が期待される長期滞在需要の取り込みを図る等、新規の需要喚起に努めました。
- サービス面では、お客様からの投票で選ばれた機内食の人気メニューを、12月から日本発のプレミアムエコノミーとエコノミークラスで提供する等、サービスの向上に努めました。

結果として、国際線旅客収入は590億円の増収(前年同期比15.2%増)となりました

(増減率、利用率を除き、単位未満は切り捨て)

【国際線旅客】	平成30年3月期 第3四半期	平成29年3月期 第3四半期	増減	増減率(%)
旅客収入(億円)	4,474	3,884	590	15.2
旅客数(千人)	7,238	6,751	487	7.2
座席キロ(百万)	48,194	44,751	3,443	7.7
旅客キロ(百万)	36,684	33,825	2,859	8.5
利用率(%)	76.1	75.6	0.5	——

③貨物

- 国内線貨物では、需要が好調な国際線との接続貨物を取り込んだものの、羽田発貨物の取り扱いが減少したこと等により、輸送重量は前年同期を下回りましたが、運賃単価の改善を図ったことから、収入は前年同期を上回りました。
- 国際線貨物では、北米・欧州向けの自動車関連部品や電子機器を中心とした旺盛な貨物需要を背景に、日本発海外向けは好調に推移しました。海外発においても、アジア・中国発の日本向け貨物が好調に推移したことに加え、中国発北米向けの三国間貨物を取り込んだ結果、輸送重量・収入ともに前年同期を上回りました。
- また、当社グループは今後需要の拡大が期待される医薬品輸送サービスの拡充を図るため、日本の航空会社として初めて、国際航空運送協会(IATA)が策定した医薬品輸送における国際品質認証である「CEIV ファーマ」を取得しました。

結果として、国内貨物収入は微増(前年同期比 0.1%増)、国際貨物収入は 205 億円の増収(前年同期比 30.5%増)となりました。(増減率、利用率を除き、単位未満は切り捨て)

【貨物】		平成 30 年3月期 第3四半期	平成 29 年3月期 第3四半期	増減	増減率(%)
国内線	貨物収入(億円)	236	236	0	0.1
	輸送重量(千トン)	338	347	▲9	▲2.6
	有償貨物トンキロ(百万)	347	353	▲5	▲1.7
国際線	貨物収入(億円)	881	675	205	30.5
	輸送重量(千トン)	763	715	48	6.7
	有償貨物トンキロ(百万)	3,403	3,101	302	9.7

④その他

- マイルージン付帯収入、バニラ・エア(株)の収入、Peach・Aviation(株)の収入、機内販売収入、整備受託収入等で構成される航空事業におけるその他の収入は 2,092 億円(前年同期 1,517 億円、前年同期比 37.9%増)となりました。
- バニラ・エア(株)では、台湾線を中心とした旺盛な訪日需要を取り込んだことに加え、航空券の早期販売を実施する等、増収に努めました。当第3四半期における輸送実績は、旅客数は 2,019 千人(前年同期比 31.8%増)、座席キロは 3,746 百万席キロ(同 23.0%増)、旅客キロは 3,205 百万人キロ(同 23.2%増)、利用率は 85.6%(前年同期差 0.1%増)となりました。
- Peach・Aviation(株)では、9月から仙台＝札幌線、仙台＝台北線を新規開設し、仙台空港を本格的に拠点化した他、札幌＝福岡線、札幌＝台北線を新規開設し、ネットワークの充実を図りました。当第3四半期における輸送実績は、旅客数は 3,771 千人、座席キロは 5,073 百万席キロ、旅客キロは 4,388 百万人キロ、利用率は 86.5%となりました。

(3)航空関連事業・旅行事業・商社事業・その他

- 羽田空港、関西空港における空港地上支援業務の受託が増加したこと等により、売上高は 2,115 億円(前年同期比 9.9%増)、営業利益は 114 億円(同 26.3%増)となりました。
- 旅行事業では、国内旅行は、ダイナミックパッケージ商品「旅作」では、プロモーションと商品力の強化による需要の早期取り込みを図ったものの、主要な北海道、沖縄、関東方面の集客が伸び悩んだこと等から、売上高は前年同期を下回りました。海外旅行は、「ANA ハローツアー」において、重点的に販売を強化しているハワイに加え、北米方面の取扱高が好調に推移したこと等から、売上高は前年同期を上回りました。訪日旅行は、他社との競争激化により取扱高が減少したこと等から、売上高は前年同期を下回りました。これらの結果、売上高は 1,219 億円(前年同期比 0.1%減)、営業利益は 36 億円(同 13.2%増)となりました。
- 商社事業では、リテール部門における国際線旅客数の増加や訪日旅客の嗜好変化にあわせた商品を充実させたこと等により、空港免税店「ANA DUTY FREE SHOP」や空港物販店「ANA FESTA」の売上高は前年同期を上回りま

した。一方、食品部門では、主力商品であるバナナの取扱高が、マーケットの競争激化により減少したこと等から、売上高は前年同期を下回りました。これらの結果、売上高は 1,065 億円(前年同期比 3.1%増)、営業利益は 36 億円(同 5.8%減)となりました。

- その他では、不動産関連事業や航空保安警備事業が堅調に推移したこと等により、売上高は 281 億円(前年同期比 11.8%増) 営業利益は 23 億円(同 110.7%増)となりました。

(4) 連結財政状態

(自己資本比率、D/Eレシオを除き単位未満は切り捨て)

【連結財政状態】	平成 30 年3月期 第3四半期	平成 29 年3月期	増減
総資産(億円)	25,345	23,144	2,201
負債(億円)	14,901	13,902	998
純資産(億円)	10,444	9,241	1,202
自己資本(億円) (注1)	10,324	9,191	1,133
自己資本比率(%)	40.7	39.7	1.0
有利子負債残高(億円) (注2)	8,193	7,298	894
D/Eレシオ(倍) (注3)	0.8	0.8	▲0.0

注1: 自己資本は純資産合計から非支配株主持分を控除しています。

注2: 有利子負債残高にはオフバランスリース負債は含みません。

注3: D/Eレシオ=有利子負債残高÷自己資本

(5) 連結キャッシュ・フロー

単位: 億円(単位未満は切り捨て)

【連結キャッシュ・フローなど】	平成 30 年3月期 第3四半期	平成 29 年3月期 第3四半期
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,608	1,713
投資活動によるキャッシュ・フロー	▲2,859	▲1,725
財務活動によるキャッシュ・フロー	114	31
現金および現金同等物期末残高	2,963	2,664
減価償却費	1,118	1,039

2. 平成 30 年3月期の見通し

- 平成 30 年3月期の見通しにつきましては、昨年 11 月1日に発表いたしました連結業績の見通しどおりに概ね推移しているため、連結業績予想の見直しは行いません。

単位: 億円(単位未満は切り捨て)

【平成 30 年3月期見通し】 (連結業績)	予想	前期実績 (平成 29 年3月期)	増減
売上高	19,250	17,652	1,597
営業利益	1,600	1,455	144
経常利益	1,500	1,403	96
親会社株主に帰属する 当期純利益	1,320	988	331

以上